

視察先別報告 インドネシア

【青年海外協力隊】 コミュニティ開発隊員活動視察

概要

県地域開発企画局の監督のもと、同局および村役場のスタッフと共に住民の経済的自立や村行政のキャパシティ・ビルディング、エンパワーメントを目指した活動を支援する。また、教育・衛生・健康など住民に対する啓発活動を行う。

1 井上 佳奈子 サンプルンガン村はゆったり時が流れているような穏やかな村で、到着すると関口隊員と村長のハッジヤ・ヌルハダー氏があたたかく出迎えてくださった。関口隊員はこの村に派遣されてまだ2ヶ月ほどということだが、道行く村民や子供から「エミ！」と親しげに声をかけられて、村長さんも彼女を娘のように思っているとおっしゃっていた。彼女はこの村の問題を発見し解決するために村民と積極的に会話し、村のごみ問題や女性の収入向上に興味を持ったという。海辺を案内してもらおうと、確かにごみが散乱しており、ごみの中に混じっているガラス等で子供が怪我をすることもあるそうだ。海辺は小規模ながらリゾート地が作られており、ここで彼女は村の女性と協力してお土産を販売し、女性の収入向上につなげたいと語っていた。のどかな村が抱える問題に村民と同じ視線から取り組もうとする彼女の姿勢、そしてその穏やかな笑顔が印象的だった。

2 貫名 貴洋 7月に着任したばかりの関口絵美隊員の奮闘ぶりがわかりやすく目に入ってきた。サンプルンガン村において、①小学校教育、②海岸のごみ問題、③女性向けのスモールビジネス展開の3つの課題に取り組んでいる。インドネシアでは「ポイ捨て」が日常的に行われている。過去であれば、梱包に有機物を利用していたから問題もさほど大きくなかったであろうが、現在では自然に還らないビニールやプラスチック製が溢れている。学校内ではそれらが燃やされたり、街中のいたるところにごみが散乱していたり、海岸では打ち上げられたごみそのままだけで残っていたりする。こうした問題を地域住民とともに改善しようと関口隊員が努めている。答えが必ず出るとは限らないテーマへの課題解決学習を通して、小学校で子供達と一緒に解決策を考え、協力してごみ削減に向けた企画・実行をしているとのことだった。また、村にあるもの（例えば貝殻など）を利用して女性がキーホルダーなどを作り、2011年に設立された村内の観光施設内において委託販売をするというスモールビジネスモデルも構築しようとしている。

3 國司 まゆ 正直この分野で活躍できる力を持った隊員が日本の若い人であるのだろうか、という思いで伺いました。というのも今市役所に勤務している身として、また地域コミュニティに根を張っている身としてその難しさを十分知っていたからです。でも行ってみたいわかりました。村のどこに行っても「エミー」「エミー」という温かい声がかけられます。首都ジャカルタから飛行機で2時間半、さらに車で1時間半の田舎町、文化的には東京から見ると沖縄県の田舎のような距離感です。赴任2か月、言葉もマカッサル語で、不安でいっぱいだろうけれど、村長のハッジヤ・ヌルハダーさんの家にホームステイしながら笑顔で頑張っている彼女を見てると、きっと2年後この村にとってプラスになることを彼女はしてくれると思いました。その昔この国に来た時私は「おしん」「おしん」と声をかけられました。まじめで一生懸命で苦勞を乗り越えて成功した日本人としてのイメージを押し付けられているのを感じ、こそばゆい思いをしましたが、彼女はきっと新しい日本人のイメージをこの村で育ててくれるのだろうと、温かい思いで村を後にしました。

4 栗原 朋子 最初の視察先で少し緊張していた私たちを笑顔で迎えてくれた関口隊員。関係者の話を聞いた後、小学校、海岸、レジャー施設を見学。歩いていると人々が隊員の名前を呼びあいさつする。着任して2ヶ月で、要請内容の確認と吟味を行っている段階であるが、村人と良い関係が築かれていることがうかがえる。こちらの村ではごみ収集車がなく、空き地や海にポイ捨てされたごみが目立つ。子供たちとごみ問題について一緒に考える活動をしているということで、粘り強く環境教育を続けてほしい。子供たちがごみは健康に害を及ぼすということを理解し、解決策を考えて行動に移し、周囲の大人たちに影響を及ぼすには相当な年月が必要である。また、女性のエンパワーメントの取り組みとして、レジャー施設で販売する土産開発のしくみ作りを計画しているという。ニーズの調査、試作、販売という一連の流れを一緒に取り組むことで、女性たちは学び、考え、今後も活躍できる場面が増えるだろう。外部の人間だから見えるもの、出来ることがあるという謙虚な姿勢で活動する隊員の人柄の良さもあり、村の人とうまく活動していくであろう。

Republic of Indonesia

- 5 佐藤 康仁 南スラウェシ州タカラール県のサンプルンガン村の主な産業は漁業と農業である。村内にはごみがいたるところに落ちており（特に海岸がひどい）、収入源の確保など多くの課題を抱えている。青年海外協力隊・コミュニティ開発隊員の関口絵美さんを訪問し、小学校、海岸、お土産販売の現場を視察して、インタビューを実施した。村内を徒歩で移動すると、至る所から「エミ、エミ」と関口さんに声をかけ、あいさつする村民の声が聞こえてくる。関口さんは着任後2カ月とのことであるが、村民とインドネシア語でコミュニケーションをとり、すでに信頼関係を築いていた。最初は苦勞もされたようだが、これからどのようにしてコミュニティ開発に協力していくかを考え、動き出しつつあるところであった。また、関口さんより、前任者の保健師隊員の話聞いたが、村民にはこの保健師隊員の記憶が大きく残っているそうである。日本人による国際協力活動が、この地で期待され、感謝されていることが窺えた。
- 6 須磨 麻寿美 着任から2カ月で地域に馴染み、住民との関係が築けている様子が分かった。これからの活動内容として、女性、特に貧困層やシングルマザーの収入向上と環境改善（ゴミ処理について）に力を入れていきたいとのこと。2年後、自分が日本に帰ってから地域の人々だけで「できる力」を身につけてほしいと語る。文化の違いから、地域の人達とのミーティングなどを設定しても時間通りに来ない。例えば海岸のゴミ拾い。子どもは来るが大人は来ないケースも当初はあったそう。そんな中でも出来ることからコツコツと取組む姿勢に青年海外協力隊員の活動意義が見てとれた。途上国開発においては「継続」と「自立」が必要だと考えている。活動姿勢を見せることで住民の意識変化が起こるのではないだろうか。
- 7 手塚 大二郎 のどかでひなびた村。ジャカルタからはるか遠く空・陸路を経てたどり着いたサンプルンガン村に降り立ち、最初に抱いた印象がそれだ。一見したところ、都会の喧騒から離れ、ゆったりとした時間の流れる地、といういかにもよいイメージで、このような場所を下手に先進国の論理で開発していいものだろうか、とも思えた。
しかし、それは表面的な捉え方に過ぎない。人懐こい笑顔で集まってくる小学生たちの後ろ、校庭の隅では、ゴミが無造作に焼かれている。そのゴミは、空き地や海に無造作に捨てられる。また、その海で働く漁師たちの収入は乏しく、困った妻たちが働こうとしても、女性が現金を得られるような仕事は、この地にはまず存在しない。
このように、問題はひとつではなく、複数の複雑に絡み合っている。この村に派遣された青年海外協力隊員の関口さんには、ゼネラリストとしての手腕が試されるだろう。
- 8 宮原 昌宏 村長はインドネシアでは数少ない女性首長。とてもおだやかだが、同行中に見せた住民一人ひとりと気さくに会話をしながら悠然と歩く姿から、村に対しての想いと村人からの信頼の厚さが伺えた。この首長の家にホームステイし活動する若い関口隊員に、自分の娘のように愛情を持って接している姿が印象的だった。
同席した男性秘書のサムスル氏は言葉は少ないが、思慮深く聡明で、村に対しても人一倍の思いを持っていることが伝わってきた。包容力があり、地域への想いの強いカウンターパートの方々とは活動をともしずることは、隊員にとっては、とても素晴らしい経験になると思った。ゴミが散乱する道中、赴任して間もない隊員の「村の子供達への環境教育を通じて、この国の未来がよりよいものになることに貢献したいです」と、笑顔で熱く語ってくれた姿はとてもステキだった。